

第三圖版説明

A-1. 全[ス・フ]。

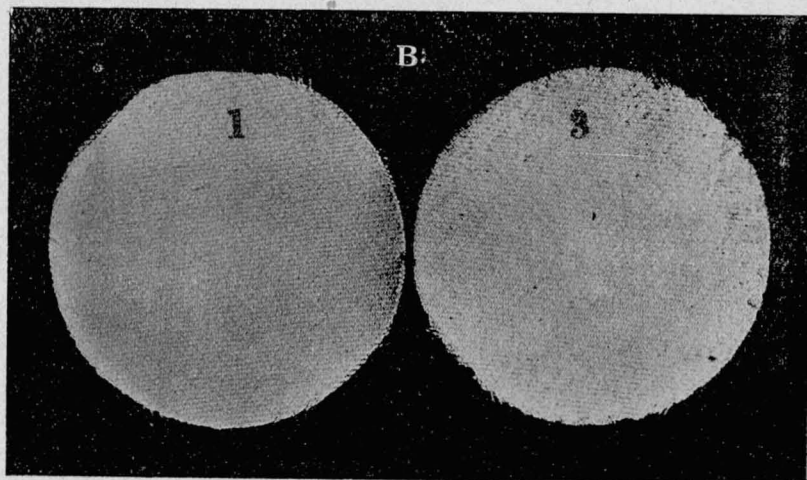
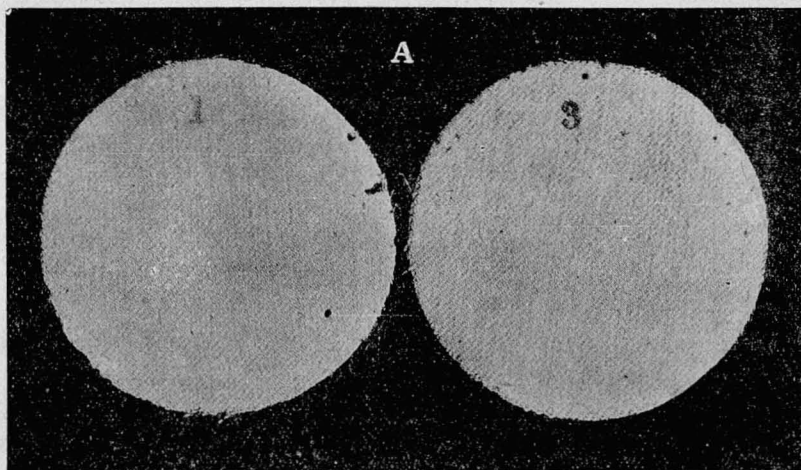
A-3. [ス・フ]と羊毛混織。

B-1. 全[ス・フ]。

B-3. [ス・フ]と羊毛混織。

凡べて少々縮小。

説明の詳細は[ス・フ]の蟲蝕ひを参照せられたし。



「ス・フ」の 蟲 蝕 ひ

山 田 保 治

「ス・フ」は蟲が食はないと聞いて居たのに、蟲が食つて困ると云ふことを最近方々で聞かされたり、尋ねられたりする。「ステーブル・ファイバー」は蟲が食はないと、當局者によつて宣傳されたのは、遂まだ耳新しいことで、此理由とする處は、恐らく、羊毛は動物質であつて、「ス・フ」は植物質であるから、羊毛を食ふ蟲は「ス・フ」は食はないと、考へた位のもので、詳細な實驗をやつた上での説ではない様に思はれる。蟲に聞いて見ればよくわかることだらふが。

獨逸の或る學者で「蟲が「ス・フ」を食つても消化をしないと」云ふ説を稱へて居る仁がある。消化の問題は生理學の領域に入る。消化しないにしても、食つて相當被害を蒙むつて居る以上は、之が對策を考へなくてはならない。

第三圖版は、全「ス・フ」と「ス・フ」羊毛混織の布を餌料とし、供試蟲としては「ヒメマルカツラブシムシ」の老熟幼蟲を使ひ、昭和十三年十一月二十五日より昭和十四年三月四日までの100日間、攝氏の略26度に保てる恒温器の中で飼育した結果を示したものである。飼育容器は「ベトリシャーレ」を使ひ、次の三組に分けて各々の蝕害状況を觀察した。

Aの1. 全「ス・フ」供試幼蟲3匹。

Aの3. 「ス・フ」と羊毛混織、供試幼蟲3匹。

Bの $\left\{ \begin{array}{l} 1. \text{ 全「ス・フ」} \\ 3. \text{ 「ス・フ」羊毛混織} \end{array} \right\}$ 各1枚を同一容器に入れ、供試幼蟲は6匹。

以上の結果より見れば、Aの1,3.共に供試布は蝕害されたが、此2枚を比較するときは「ス・フ」羊毛混織よりも、全「ス・フ」の方が蝕害面積は大である如く見え。全「ス・フ」と「ス・フ」羊毛混織を同一容器に入れて置いたBでは、全「ス・フ」よりも「ス・フ」羊毛混織の方が著しく蝕害されて居る。處が此所に注意を引くことは、之等の供試幼蟲は凡べて蛹化せずに斃れてしまつたことである。

尙ほ附け加へて置きたいことは、「ヒメマルカツラブシムシ」の幼蟲は、元來、羊毛其他動物質のものを主として蝕害する害蟲であるが、時に白米の如き植物質のものを加害することもある。斯の様な僅かな實驗材料で、考察するのは無理なことではあるが、之によつて「ヒメマルカツラブシムシ」の幼蟲も、「ス・フ」を加害することがあると云ふ位のこととは言つても差支が

ないと思ふ。

同じ植物質のものでありながら、木綿は殆んど虫害を蒙らないのに、〔ス・フ〕に限つて特に蟲にやられるのは、何か相當の理由がなくてはならない。之には種々の原因があることだらふ。此所で思ひ出されるのは、遂先日のこと、被服厚生研究會の奈良千代子氏から、次の様なことを伺つた。『同じ〔ス・フ〕でありながら、凝固液の相違によつて、染色状態が違ひ。蟲によくやられるのと、あまりやられないのが有る』と云ふことである。ついでに書き加へて置くが、『被服厚生研究會研究室の陳列室は、全く痒い所へ手が届く様に、實物を豊富に集めてそれぞれ説明を書き添へてある。是非一度は見學して置いてもよい所だと思ふ。』

上述の如く、操作工程の方法などによることも考へられるが、又繊維の構造によることも可成り、重要な役目をして居るのではなからふか。『同じ麥粉で造られたものでありながら、饅頭は好きだが、素麺は嫌ひだとか、冷麥は食べるが、饅頭は好かない、など、云ふことは、常に吾々の耳にする處である。同じ生物であるから、蟲にも此様な選り好みがあるのかも知れない。』〔ス・フ〕の虫害に就きては他日研究の上報告の機會を得たいと思つて居る。〔終り〕。

故 濱田耕作先生之思出

山 田 保 治

大正十三年秋の或日のこと、當時先生は朝鮮新羅の古墳を發掘研究して居られた、理學部の川村多實二教授と同道で私の室を訪ねられ、新羅の古墳から斯んな蟲の翅が出たから、見てくれないかと言はれて、泥にまみれた甲蟲の翅鞘の破片を二、三枚示された。拜見すると、確かに〔タマムシ〕類の翅鞘であると考へられたので、其旨を申上げると、君、〔ソウカネ、ソレハ面白イ〕と言はれながら、とても嬉しさふに呵呵と大笑された。先生は滅多に御笑ひにならない方である。之が御縁となつて、其後時々先生の御室へ御邪魔させて戴いたが、あの時位如何にも嬉しさふに御笑ひになつたことはなかつた。暫らくして後、破片の記載と〔タマムシ〕の圖を畫いて御届け致した處、先生は大變御喜びになつて、君に何か御禮をしたいから、好きな物を言つてくれないかとの仰せである。いくら辭退しても、御聞き入れがないので、兼て先生は畫が御上手なことを伺つて居たから、畫を御願ひ致した處、心易く御引受いたゞき、幾日かの後、朝鮮の田舎の景色を畫かれたのを戴いた。或日の夕方研究室へ先生を御訪ねすると、今、